ぶんきょうの図書館だより

文京区立図書館報　第112号

発　行　文京区立真砂図書館
☎(3815)6801
発行日　平成4年11月1日

特集　鷗外生誕130周年記念

海外でも話題の森鷗外展

森鷗外記念会理事長

長谷川　泉

東京都文京区教育委員会主催の森鷗外展が、日本国内だけにとどまらず、海外でもたいそう話題になっている趣を、最近の情報に基づいて若干述べる。

文京区教育委員会主催の区制四十五周年・鷗外生誕百三十周年記念事業としての森鷗外展は、(1)文京区立鷗外記念本郷図書館　(2)文京ふるさと歴史館の二か所で行われる。

この両者のうち、鷗外記念本郷図書館で行われる森鷗外展の方は、森家から寄贈を受けた門外不出の貴重な文化財である鷗外をめぐる『はがきが語る観潮楼の日々』として構想された。そして鷗外忌の7月9日には、すでに「鷗外をめぐる百枚の葉書」が刊行された。鷗外忌に参会された熱心な鷗外ファン、および本書の寄贈を受けた一部の関係者は、その内容を見てびっくり仰天したのである。その反響の一端をまず述べる。

本書の刊行計画と、その内容の概略については、事前に諸新聞などに報じられたので、そのことを伝え聞いた海外の文化人からまず、品切れにならないうちに予約するから確実に入手できるようにして欲しいという申し込みがあった。デンマークのコペンハーゲン大学の長島要一博士もその一人である。

またドイツのハイデルベルク大学のウォルフガング・シャモニ教授からは、しばらく別の仕事のために森鷗外から遠ざかっていたが、本書を見て早くまた鷗外の仕事にもどりたい刺激を受けたと知らせて来た。そればかりではない。毎晩寝床に持ち込んで眺めて愉しい時間を過ごしている旨記して来た。編集・執筆にあたった森鷗外記念会のスタッフとしては、国内だけでなく国際的にも大きな評価を得たとして、まことにうれしい限りである。

さらに中国南京市の訳林出版社の李景端社長・編集長を団長とする中国外国文学出版研究会の代表訪日団員7名の率直な感想も、内容のすばらしい香気、鮮麗な原色印刷の効果をたたえており、日本側接待責任者として寄贈した私は、大いに面目をほどこした。本年11月上旬には私が団長として7名の団員で訪中することを李景端団長に約束しているので、「鷗外をめぐる百枚の葉書」が文化交流に果たした意義が大きいという感銘を受けた。

「鷗外をめぐる百枚の葉書」は何せ千二百余枚の葉書の中から百枚を厳選して、表裏実物大の総原色複製という画期的なものであるから、文学史的価値が高い。興奮して眠れなかったという感想が寄せられているゆえんである。

鷗外記念本郷図書館のある場所は、焼失した観

潮楼の跡地である。ゆえに在りし日の観潮楼の全景や沙羅の木の詩碑（永井荷風筆）や観潮楼歌会また親友賀古鶴所と幹事をつとめた常磐会の歌会をめぐる人物郡像木下杢太郎・上田敏・石川啄木・与謝野寛・北原白秋・佐佐木信綱・伊藤左千夫らが葉書を通してその面貌をあらわしている。また軍・政界の大御所であった山県有朋と鷗外の関係は、常磐会だけでなく、生涯を通じての陽画・陰画の機微が存在するだけに、興味をそそられる資料が展示される。常磐会詠草や歌稿は、歌の露頭だけでなく、叙情紙背の人間模様まで洞察するならば、これまた大きな興味をそそられる。

鷗外は日露戦争には第二軍の軍医部長として大陸の戦地に赴いたが、陣中の竪琴と称される「うた日記」を残した。戦野と留守宅の観潮楼とを結ぶ便りは、文面は簡潔であっても、ユマニスト鷗外の本領を遺憾なく発揮するものであった。多彩な人脈に彩られたそれらの葉書の息づかいが、見る人の胸を打つ。

鷗外と夏目漱石とは、日本近代文学の担い手としては格別に抜きん出た存在であった。文京区の至近の距離に住み、心の交流だけでなく著書の交換などを通じても、共に反自然主義の立場にたつ共鳴共感が深かった。展示されている漱石の葉書の数々から、その息づかいが読みとられる。

*

文京ふるさと歴史館での「ライフステージとしての文京」展は、鷗外記念本郷図書館での展示と歩調を合わせて、生誕百三十周年記念の展示や諸行事が盛りあげられる。木下杢太郎の頌詞「テエベス百門の大都」の全貌がクローズ・アップされるように工夫されている。ふるさと歴史館はハイテクを駆使した施設として知られているだけに、その機能も発揮される。近頃の若者では鷗外の本名を森林太郎と称する者もあると聞くから、啓蒙の役割を十分に果たすと思われる。

生誕百三十周年、没後七十周年を期した鷗外展は、すでに生地津和野町での日独文化交流の実績をあげたものを終え、（財）ＮＨＫサービスセンター主催の東京・大阪展を終え、広島・盛岡展を残している状態にあり、次いで東京都近代文学博物館での開館二十五周年記念をうたった「日本文学の巨峰　森鷗外展」が10月25日まで開催された。文京区教育委員会主催の鷗外展は、そのあとを受けて本年掉尾のものとなるだけに、それなりの特色があると思う。

鷗外の国際的評価は、すでに外国で外国人が書き外国で出版した「森鷗外」なる単行本がアメリカ１冊（英語）、イギリス１冊（英語）、ソ連（ロシヤ）２冊（露語）、ドイツ２冊（独語）が刊行をみている。計画中のものに中国１冊（中国語）計７冊ということになる。これは他の日本の作家・文化人にはないことである。外国でつとに評価されている谷崎潤一郎・夏目漱石・芥川龍之介・川端康成・三島由紀夫らにも見られないことである。

「テエベス百門の大都」鷗外の活躍舞台は医学・医事・文学・芸術・美学・哲学など各般にわたっていたが、津和野藩の典医の父から医学に進むことを運命づけられ、上京して東大医学部に学んだ時からの人生コース、卒業後の陸軍軍医としての歩み、同級生の先頭をきってのドイツ留学、帰国後に累進して軍医最高位の医務局長にいたり治績をあげたことを考えれば、医学・医事の面はきわめて大切である。今回の展示品の中に医務局長時代に愛用した大型の事務机がある。珍しいものである。国立病院医療センター（元国立東京第一病院）に保管されているもので、この大型机は破損していたものを当時の織田敏次院長（東大名誉教授）が丁寧に補修して大切に陳列している曰くつきの珍品である。この補修・陳列には私もいささか関与し、記念披露の際に講演をしたいきさつがあるので感慨の切なるものがある。

その他医師としての鷗外では先輩の石黒忠悳軍医総監や青山胤通東大教授らとの関係も大きな関心の的となる。医務局長の先任者小池正直は東大医学部の同期生であったばかりでなく、鷗外の陸軍入りを推進する上申書を出して支持した仲であるが、晩年は必ずしもしっくり行かなかった波瀾が認められる。鷗外の小倉十二師団軍医部長への配置も含めて人事問題は、秘められている謎解きの課題をはらんでいる。

鷗外の衛生学者や性心理学者としての資料も展示品の中にある。鷗外は「性欲雑説」などでは当時としてはすぐれた開拓的な業績を残している。自伝的な要素を含む「キタ・セクスアリス」が発禁になったのは、鷗外の意図した自然主義への挑戦が、裏目に出た結果であった。内容も今日の目から見て発禁になるような作品ではない。性知識であろうが、安楽死問題であろうが、鷗外の科学的探求心は終生輝いていたのである。一般の水準との隔差が鷗外に不幸をもたらすことがあったのは、この場合だけではない。

鷗外の「テエベス百門の大都」の大きな領域を占めるものとして翻訳上の業績がある。有名な「即興詩人」にしても「ファウスト」にしても大きな影響力を持つた。各国文学の万華鏡ともいえる「諸国物語」もある。「椋鳥通信」の啓蒙的、速報的な紹介も、余人の企て及ばぬところであった。クラウゼヴィッツの「戦論」「大戦学理」の翻訳も、ドイツ留学時代の早川大尉（のち田村怡与造将軍）への和訳に始まり小倉時代に完成して日露戦争に勝利をおさめる遠因をなしている。

しかし鷗外は洋行帰りの保守主義者と言われたように、海外一辺倒ではなく、日本のよいものはあくまでも存置する立場を保った。その意味で鷗外を律した価値基準は、決してバタくさくもなく、また偏狭な国粋主義者でもない調和的で科学的な座標を持っていた。「東京方眼図」に示したような新しいアイディアの持ち主でもあった。

鷗外こそ、ほんとうの「テエベス百門の大都」であったのである。

長谷川　泉（文芸評論家）
★郵113 文京区西片１－１－11
大正７年（1918）２月25日　千葉生、東大国文卒、国学院大講師、医学書院相談役、ペンクラブ会員、川端文学研究会会長、森鷗外記念会理事長、「森鷗外論考」「川端康成論考」。

～ 生誕130周年記念 ～

森　鷗外展　開催

◇ **鷗外記念本郷図書館** ◇

■はがきが語る観潮楼の日々
11月７日(土)～15日(日)　午前10時～午後７時（土・日　午後５時）

■記念行事

○ひとり語り
「高瀬舟」作／森鷗外　出演／池田一臣（現代劇センター真夏座）
11月６日(金)　午後６時開場　６時50分開演
会場＝真砂図書館
11月７日(土)　午後１時30分開場　２時開演
会場＝鷗外記念本郷図書館

○記念文学講演会
「鷗外と明治」江藤　淳氏（文芸評論家）
「鷗外と東京」吉本隆明氏（文芸評論家）
11月８日(日)　午後２時
会場＝東京大学大講堂（安田講堂）

○文学講演会
「観潮楼のはがきコレクション」
中井義幸氏（東京芸術大学教授）
11月９日(月)　午後３時
会場＝鷗外記念本郷図書館

○史跡めぐり
「ふるさと歴史館コース」
戸畑忠政氏（文京区文化財保護審議会委員）
11月10日(火)　午後１時
「講安寺コース」
金子昭三氏（文京区文化財調査委員）
11月13日(金)　午後１時
定員各40名（往復はがきにて事前に申込を受付けます）
鷗外記念本郷図書館より出発

◇ **ふるさと歴史館でも鷗外展** ◇

―特別展―　ライフステージとしての文京
11月７日(土)～12月６日(日)
11月16日(月)、24日(火)、30日(月)は休館

鷗外生誕130周年記念「森鷗外展」

～はがきが語る観潮楼の日々～

森鷗外は明治25年、駒込千駄木町21番地の団子坂上に「観潮楼」と名づけた邸宅を構えました。この「観潮楼」跡地には昭和37年、区立鷗外記念本郷図書館が建設され、記念室が置かれました。記念室には鷗外の長男森於菟さんから寄贈された鷗外の遺品が所蔵されていますが、なかでも千二百余枚に及ぶ葉書は貴重なコレクションとなっています。この観潮楼を舞台に交わされた鷗外自身の葉書や、当時の著名な文人達からの葉書を公開展示し、素顔の鷗外の観潮楼のの日々を紹介するのが今回の「鷗外展」の主要な内容です。

1．陣中の竪琴 ーうた日記の世界ー

森鷗外は日露戦争に奥保鞏大将が司令官の第二軍軍医部長として従軍しました。第二軍は明治37年に編成され、広島に集結した後に軍司令部は宇品港より戦地の中国へと出発します。鷗外は中国の戦地から家族や友人宛てに数多くの葉書を書きました。戦地からの便りには詩歌や俳句が書き添えられていましたが、後に鷗外は陣中で詠んだ作品を集成して『うた日記』（明治40年）を刊行しました。『うた日記』は詩歌の種々な形式を含んでいることと、戦争の間に作った詩歌を集めていることで鷗外の全詩歌の系列の中でも特異な位置を占めています。この書について佐藤春夫は「古今東西のあらゆる詩歌の集大成を夕空の星の如く追追に見出した」（『陣中の竪琴』）と絶賛しています。この書は一方では日露戦争文献としての側面ももっています。多くの死を見つめた鷗外は中でも激烈だった南山の戦いを背景に「扣鈕」を書きました。「南山のたたかいの日に／　袖のこがねのぼたん／　ひとつおとしつ／　その扣鈕おし／　」（「扣鈕」の冒頭部分）と詠んだ鷗外は、身に添って自分と同じ体験をしてきた「扣鈕」を一つ失うことが、自身のかけがえのない青春の喪失であることを暗示させました。日露戦争は近

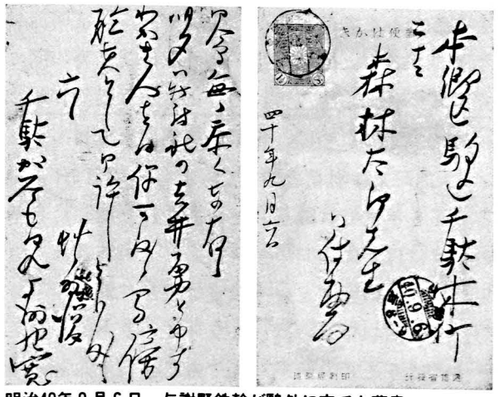
明治38年１月11日（消印）鷗外が戦地より子息・於菟に宛てた葉書

代史上でも本格的な重火器が初めて使用され、多数の戦死者を出しましたが、赤痢、腸チフス、脚気による病死者は、武器による死傷者を上回っています。日露戦争は一面では寒冷地での伝染病との戦いでもありました。軍医部長としての鷗外は防寒対策を考案しましたが、なかでも米飯の凍結防止のため醤油を加えて焼いた握り飯は効果があったようです。また鷗外は戦地から、妻志げに対し「やんちゃ殿」とか「しげちゃん」とか呼びかけた便りを書いています。しかし鷗外出征中、志げは生まれてまもない長女茉莉を連れて、芝区明舟町の実家の持ち家に帰っていたのでした。明治38年８月に日露講和会議は妥結し、９月には休戦議定書が調印され、ようやく鷗外も明治39年１月に広島に着き東京へと戻りました。一方、戦地の鷗外にも家族や友人から多くの葉書が寄せられています。とりわけ「明星」の若い世代を代表する歌人の平野万里は数多くの交信をしていますが、万里と鷗外とは長男の於菟を介して奇妙な縁がありました。ドイツ留学から帰国した鷗外は海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚しますが、於菟が生まれると同時に家を出て離婚してしまいます。この於菟を鷗外は本郷森川町で文具店を開いていた平野甚三の家に預け、甚三の妻に乳母になってもらいます。この平野家の二男が万里で、彼は幼い頃から森家に親しく出入りをしていましたが、郁文館中学から第一高等学校に進学する頃から文学に興味をいだき始め、「明星」にも投稿するようになります。鷗外は万里が「明星」で活躍していることを日露戦争従軍中に初めて知り、その驚きを妹の小金井喜美子宛ての手紙にも書き、万里が優れた若手の歌人であることを認めています。万里も陣中の鷗外と交信をして、鷗外の短歌を「明星」に掲載する仲介役となり、また後には観潮楼歌会の世話役として鷗外を助けました。このように鷗外が戦争中に詩歌に親しみ、「明星」の短歌活動に注目していたことが観潮楼での歌会を開催する大きな要因となりました。

2．観潮楼の日々 ー 歌会と人々との交流

鷗外は日露戦争従軍中から「明星」の新しい短歌運動に注目していたことが妹の小金井喜美子宛ての手紙からも分ります。「明星」を主宰していた与謝野寛（鉄幹）は落合直文の浅香社同人から出て早くから短歌革新論を唱えていました。与謝野寛の第一歌集『東西南北』（明治29年）には森鷗外も序詩を寄せて支援していますが、寛は明治32年に新詩社を結成し、翌年には「明星」を発刊しました。新詩社は作歌の理念として「われらは互に自我の詩を発揮せんとす。われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず」と揚げ、新しい短歌運動を目指していました。「明星」を代表する歌人与謝野晶子の『みだれ髪』などの短歌作品は当時の若い世代に大きな影響を与えました。この短歌革新の流れに共鳴して新詩社には若き石川啄木、北原白秋、木下杢太郎、高村光太郎、平出修などの詩人、歌人が結集しました。新しい時代に相応しい短歌を創り出そうとしていた観潮楼歌会には新詩社の同人が数多く参加することになります。

鷗外は観潮楼歌会に新詩社と対立していた根岸短歌会の歌人を招き互いの交流を図ろうとしました。明治32年に正岡子規が結成した根岸短歌会は子規の没後に伊藤左千夫が中心となり「馬酔木」を発刊して写実を基調とした万葉調の短歌を目指していました。歌会には左千夫の他に斎藤茂吉、長塚節などが参加しますが、根岸短歌会同人であった三井甲之は左千夫の歌会参加を激しく非難します。しかし左千夫は新詩社同人との交流から影響を受け、明治41年には三井甲之と別れて「アララギ」を発刊します。また歌会には明治31年から竹相会を主宰していた佐佐木信綱も数多く参加しています。信綱と鷗外は古くから親交があり、信綱の歌集『思草』（明治36年）に鷗外は序文を寄せて、短歌に新しい生命を吹き込む必要を説いています。竹相会の発行した「こころの花」は流派にとらわれない編集方針から多くの歌人が結集し緩やかな改革を目指した短歌が掲載されました。このように観潮楼歌会には当時の短歌の世界を代表する歌人が参加し交流が図られました。



明治40年９月６日　与謝野鉄幹が鷗外に宛てた葉書

鷗外は観潮楼歌会を主宰すると共に、明治39年に山県有朋の意向を受け友人の賀古鶴所と幹事となって歌会の常磐会を設立します。この歌会の選

者は井上通泰、小出粲、大口鯛二、佐佐木信綱などで旧派に近い歌風を持った歌人達でした。観潮楼歌会は明治40年から43年にかけて開催されましたが、常磐会は山県有朋が死去する大正11年まで続けられました。鷗外は観潮楼歌会では新しい象徴詩的な短歌を詠む一方で、常磐会では旧派に近い歌風の短歌を詠みました。この常磐会を通して鷗外は明治の元老である山県有朋と直接に知りあうようになります。また山県有朋に鷗外を紹介した賀古鶴所は東京医学校時代の鷗外の同期生ですが、有朋のヨーロッパ視察に随行して厚い信任を得た軍医で、鷗外の生涯にわたる友人でした。山県有朋は若い頃より短歌に親しんでいましたが、明治時代に相応しい歌詞を研究するため常磐会を設立させ、自分の邸の椿山荘や小田原の別荘の古稀庵で歌会を開催しました。

この時期に鷗外は永い作家活動の沈黙を破って『半日』（明治42年）を発表しますが、この小説には鷗外の家庭の問題が反映しています。一度目の結婚生活に失敗した鷗外は小倉赴任時代に判事荒木博臣の長女志げと再婚しましたが、嫁と姑の問題に悩まされました。当時の鷗外の母親みねの日記には「大雨、きょうも茂子不在。過る四日、スバルという雑誌に半日という小説、茂子のことを書きたるもの故、中々に面倒なり。」（明治42年３月10日）とあります。鷗外は母親と妻の間に立って家長として苦労していますが、明治40年には母の健康のために、千葉県夷隅郡東海村字日在（現大原町）に別荘を建てています。みねは死去する大正５年まで「鷗荘」と命名された別荘に毎年のように保養に出向いています。この別荘は「白髪の主人」の回顧という設定で書かれた小説『妄想』（明治44年）の舞台になっています。作中に「主人はそこらを一廻りして来て、八十八という老僕の拵えた朝餉をすまして、今自分の居間に据わった処である」として八十八という老僕が登場しますが、この人物には実在のモデルがいたことが、みねが日在から出した葉書から分ります。みねが日在の別荘から千駄木の家に宛てた葉書は、観潮楼での日常生活の様子もうかがえる貴重な資料となっています。

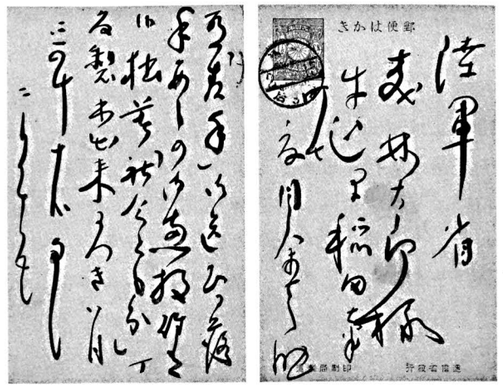
３．千駄木のメエトル（先生）森鷗外

※メエトル＝Maître フランス語、先生の意味

歌会を中心とした文学者との交流の一方で「テエベス百門の大都」と称された鷗外は各分野にわたる人達と交わり千駄木のメエトル（先生）と呼ばれました。鷗外を自身の師と仰いだ一人に詩人の上田敏がいます。上田敏は明治７年に東京に生まれ、鷗外らと創刊した「萬年艸」に「春の朝」（ブラウニング）「山のあなた」（ブッセ）などの訳詩を逸名氏のペンネームで発表しています。これらの作品は後に訳詩集『海潮音』（明治38年）に収められ、「遥に此書を満州なる森鷗外氏に献ず」との言葉と共に鷗外に贈られています。上田敏は明治40年に鷗外、藤村、漱石、寛らに送られてヨーロッパへの外遊に旅立ちます。その途上、鷗外の『即興詩人』や『うたかたの記』ゆかりの地を訪れて、その感動を絵葉書に書いて送っています。帰国後、観潮楼歌会にも出席し、「舞」の題で「君は舞う　我は舞いえず　いたずらに　胸のさわぎを　心にて舞う」といった短歌を残しています。敏の芸術至上主義といわれる芸術観は鷗外、荷風に最も近かったようですが大正５年、43歳の若さで生涯を閉じてしまいます。

明治の二大文豪といわれる鷗外と漱石は、ともに千駄木町57番地の家に住んでいます。この家で漱石は『我輩は猫である』を書き、「猫の家」と呼ばれました。この家に鷗外も明治23年から25年にかけて住んでいましたが、このような奇縁にも、かかわらず、二人の間には実際上の交流はありませんでした。しかし鷗外の作品『キタ・セクスアリス』（明治42年）や『青年』（明治44年）などの記述や、漱石の談話などから互いに意識し尊敬していたことが窺われます。二人の交流が形となって表われたのは互いの著作の交換です。明治43年、鷗外は漱石の修善寺大患後の入院中に『渭滴』を贈りますが、漱石は感謝の気持ちを「鷗外漁史より『渭滴』を贈り来る、漱石先生に捧げ上ると書いてありたり恐縮」と日記に書きます。この後も互いに著作を交換したことが漱石の鷗外宛の葉書からも分りますが、その交流も大正５年に漱石が死去したことで閉じられました。

また鷗外は多くの美術家との交流がありましたが、その最初はドイツ留学時代の画家原田直次郎とのものでした。鷗外は原田直次郎の人柄にも魅かれ作品『うたかたの記』（明治23年）の主人公のモデルとしました。鷗外はドイツ留学時代に美術への関心を深め、帰国後もドイツで学んだ美学理論を背景に活発な評論活動を展開しました。この頃に始まる鷗外の美術評論家としての活躍は、明治40年から文展の第二部洋画審査員となって晩年まで続きます。鷗外と美術家との交流は、その中から生まれ、美術雑誌「みずゑ」を創刊した水彩画家木下藤次郎は作品『ながし』（大正２年）、諏訪の画家宮芳平は作品『天寵』（大正４年）の主人公のモデルとして各々描かれています。また鷗外の父親静男の代診を勤めた、山本一郎の息子山本鼎や鷗外家に勤めていた村山たまの長男村山槐多など多くの画家達との交流を示す葉書が残されています。



大正２年２月15日　夏目漱石が鷗外に宛てた葉書

明治42年に自由劇場を旗揚げした小山内薫は第１回試演として鷗外訳のイプセン作品『ジョン・ガブリエル・ボルグマン』を上演しましたが、この有楽座での公演の様子は鷗外の『青年』の中にも描かれています。鷗外はドイツ留学直後から演劇評論を書き、明治36年には戯曲『玉篋両浦島』を発表しました。この後も鷗外は数多くの戯曲を翻訳して日本に紹介し、様々な演劇人との交流を図って近代演劇に大きな影響を与えました。とりわけ自由劇場の上演作品『街の子』、『奇跡』や近代劇協会の上演作品『ファウスト』は人気を呼び一連の新劇活動の中で鷗外ブームを引き起こしました。

（８ページよりつづく）

万里が一号の、石川啄木が二号の編集を行う。この時に啄木が万里の短歌を小さな６号活字で組んだことから論争となり、啄木は自分にとって短歌は所詮、遊戯にしかすぎないとして観潮楼歌会からも遠去かっていく。

万里は明治41年、帝国大学を卒業し、明治43年には満鉄の技師となった。やがて大正元年に満鉄からドイツ留学を命ぜられたのが、万里の歌との別れになっていく。大正２年には「スバル」も終刊となったが、万里は大正４年英国人グラヂス・リリヤンスタイルと結婚し帰国する。その後、第二次「明星」の復刊に参加し、また大正12年から発刊された鷗外全集の編纂者の一人になるが、本格的な文学活動からは遠去かっていた。昭和22年に寛の長男与謝野光を中心とした第三次「明星」の顧問となるが創刊号発行直前に生涯を閉じた。

文京区ゆかりの文学者紹介 ⑯

平　野　万　里　明治18(1885)年～昭和22(1947)年

平野万里

平野万里は文学史上で光を浴びることの少い文学者の一人である。しかし、晩年の与謝野鉄幹を支持して第二次「明星」や「冬柏」を発刊させ、また森鷗外の主宰した観潮楼歌会の事実上の世話役として働いたのは、この平野万里なのであった。

万里は明治18年に埼玉県北足立郡大門村（現浦和市大門町）に当時大門小学校校長であった平野甚三の次男として生まれた。明治23年に父甚三は校長の職を辞して東京府本郷区森川町32番地（現東京大学正門前）に転居し、文具商兼煙草屋を開いた。森鷗外と万里の奇妙な縁は、この時に始まった。ドイツ留学から帰国して間もなく、鷗外は海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚したが、長男の於菟が出生すると同時に家を出て離婚してしまう、この於菟を鷗外は平野家に預け、甚三の妻に乳母となってもらった。以来、万里は森家に親しく出入りをして、家族の一員のような交流をした。明治29年に万里は駒本尋常小学校から郁文館中学へと進学した。郁文館中学は帝国憲法の発布された明治22年に棚橋一郎により設立されたばかりであった。校長の棚橋一郎は雑誌「日本人」を発刊させた一人で、政府の表面的な欧化政策に反発していたが、郁文館の授業は英語による原書が使用されていた。万里が入学した当時には教師の一人に若き新体詩人の土井晩翠がいて、万里も文学的な影響を受けることとなった。やがて明治34年、万里は中学を卒業して第一高等学校を受験するが、これに失敗する。この頃から文学に対する興味が生じてきて、「明星」、「半面」、「白虹」に、短歌、俳句、新体詩を投稿するようになった。明治35年に万里は第一高等学校に入学し、一高の寮で斎藤茂吉や茅野肅々と出会うこととなる。藤島武二が表紙画を描いた「明星」は明治33年に与謝野寛が主宰する新詩社により創刊されたばさりであり、翌年には与謝野晶子の『みだれ髪』が出現し、伝統的な短歌の語法が変革されていくきっかけとなった。平野万里が参入しようとしていた短歌の世界は、このように新詩社を中心とした変革の時を迎えようとしていた。

万里は一高の寮で同室の茅野肅々と共に新詩社の歌会へ参加し、夜を徹っして歌を詠む一夜百首会へも積極的に加わった。明治38年に万里は一高を卒業し文科系に進学しようとするが、家庭の事情により東京帝国大学工科大学応用化学科に入学した。この時に家を出て本郷区駒込神明町443番地に下宿する。この頃、鷗外は第二軍軍医部長として日露戦争に従軍していたが、ようやく万里が「明星」を代表する若手の歌人であることを知り、戦地から互いに交信を行うようになった。万里は陣中で詠んだ鷗外の歌を「明星」に掲載する仲介役になると共に、当時の歌壇の動向を鷗外に知らせた。明治40年に平野万里は処女出版であると共に生涯において唯一の歌集となった『わかき日』を刊行する。この歌集は新詩社の会合で知りあった玉野花子に対する相聞歌集でもあった。一方で鷗外が新しい時代に相応しい短歌を創り出そうとして主宰した観潮楼歌会の世話役としても活躍することとなった。しかし玉野花子は突然に明治41年22歳の若さで死に、また「明星」も木下杢太郎、北原白秋らの脱会により百号をもって終刊となった。「明星」に代わって「スバル」が創刊され、

（7ページへつづく）